

研究室紹介

岩手県農業研究センター 生産環境研究部 病理昆虫研究室

岩手県農業研究センターは、平成9年に、農業、園芸、畜産、蚕業の各試験場を再編整備して設立されました。本部は県南地域の北上市にあり、試験研究に関する企画と、経営・耕種部門の試験研究を行っています。また、県内各地には、畜産研究所（滝沢市）や県北農業研究所（軽米町）、南部園芸研究室（陸前高田市）等があり、それぞれの地域の立地や気象を活かした試験研究を実施しています。

病理昆虫研究室は、本部の生産環境研究部にあり、室長、研究員6名、技能員1名の計8名が在籍しています。研究室は病理チームと昆虫チームに分かれ、それぞれ3名が、「水稻・畑作物」、「野菜」、「果樹・花き」の区分で業務を分担しています。

当研究室の主な研究内容は、県内で問題となっている病害虫の発生生態の解明や、効果的・効率的防除技術の開発、総合的病害虫管理に関する技術の開発です。また最近では、水稻の高密度播種苗移植栽培など新しい栽培技術に対応した防除方法や、病害虫防除へのAI活用に関する課題にも積極的に取り組んでいます。

近年の主要な成果としては、キュウリホモプシス根腐病の総合防除技術やリンゴ枝幹害虫ヒメボクトウの防除技術、水稻鉄コーティング湛水直播栽培における病害虫防除技術などがあります。キュウリホモプシス根腐病の防除に係る成果については、岩館康哉主査専門研究員がその功績を認められ、昨年、農林水産省農林水産技術開発会議会長から若手研究者賞をいただきました。ここでは、現在実施中の研究課題から二つを紹介します。

1 ナス果実小陥没症の対策技術の開発

ナス果実小陥没症は、ナスの果実に小さな「くぼみ」が多数発生する原因不明の障害です。岩手県南地域にお



植物病原菌の分離培養作業



病理昆虫研究部のメンバー

いて、10年程前から発生し、多発圃場では収穫物の約7割を廃棄した事例があるなど、生産振興の大きな妨げになっています。

これまでの研究で、小陥没症の発生にはナス褐色斑点病菌が関係している可能性が高く、その対策として葉に発生する褐色斑点病の抑制が重要であることがわかってきました。研究室では、接種試験による小陥没症の再現など、その発生メカニズムの解明を進めるとともに、効果的な発生防止対策の確立に向けて取り組んでいます。

2 リンゴ園地における土着天敵の活用に関する研究

リンゴの病害虫防除資材の中で、殺ダニ剤は最もコストが高い資材の一つです。また、殺ダニ剤に対して、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすく、有効な薬剤が不足気味になっています。そこで、リンゴ栽培のコスト低減と殺ダニ剤抵抗性対策を目的として、土着天敵に着目した研究を進めています。

これまでの研究で、県内のリンゴ園地では、カブリダニ類がハダニ類の天敵として有望であることがわかっています。また、県内のリンゴ園地では、下草を刈らない、もしくは高刈することで土着天敵を保護し、ハダニ類の防除を軽減している事例が見られます。研究室では、リンゴ園の下草管理の方法と、使用する殺虫剤の検討を進め、ハダニ類の発生を抑制する栽培体系の確立を目指しています。

研究室には、病害虫防除部（防除所）が隣接しているほか、同じ建物に県庁農業普及技術課の農業革新支援担当が駐在しており、発生予察や防除指導、新技術の普及指導と密接に連携した研究推進が可能です。室員たちは、現場で使われ農業者の収益向上に直結する成果の創出を常に念頭に置き、日々の業務に励んでいます。

（室長 熊谷拓哉）